若者の力を認める社会に

香川県立高松高等学校１年 鈴木櫻子

「弱点を強味に」香川県の弱点は水が少ないことである。

～過去の香川県の稲作から「人の力」を考える。～

「温故知新」古きを学び新しきを知る。香川の将来を考えるとき香川から先駆けて日本を動かした事柄に注目したい。私は以前「伏石事件」を研究したことがある。伏石事件とは1922年（大正11年）6月に香川郡大田村字伏石（現在の高松市伏石町）地区の小作人たちが地主に対して小作料の削減を要求し、立ち上がった事件である。当時の香川県の過酷な稲作の現状から、取れ高に対する地主側と小作側の取り分について激しい争いがあったことが原因となった。

香川県は古来より降水量が少なく、稲作が難しい土地柄であった。江戸時代の讃岐国を代表する特産品「讃岐三白」とは砂糖・塩・木綿のことだが、いずれも乾燥地域の代名詞といえるものであり、讃岐国が古くより水の足りないことを如実に物語っている。北に中国山地、南に四国山地という大きな壁に挟まれた瀬戸内の地域は季節風の影響を受けにくく、温暖ではあるが降水量が極端に少ない。特に讃岐平野は梅雨時に雨を降らせる南の高気圧や台風による影響が非常に小さい。

しかし、小なりとはいえ、香川県は古来より広く豊かな農地を持つ「上国」であった。まともな雨が降らない讃岐が上国である理由はただ一つ「人の力」であり、それはそのまま「犠牲と英知」という言葉に置き換えることができる。「英知」とは満濃池に代表される「ため池」であり、犠牲とは伏石事件に代表される小作農民の働きであり、「どびん水」に象徴される小作農民の血と汗である。そしてその犠牲の克服は、当時の日農香川県連合会会長の前川正一氏、顧問弁護士の若林三郎氏、県会議員の平野市太郎氏といった人たちの並々ならぬ尽力によるものであった。

伏石事件から人材の育成を考える

今回この「伏石事件」を調べてみて、小作料が高すぎることに不合理を感じて動いた人がいかに多かったかが分かった。

よく３：４：３、最近は２：６：２というらしいが、10人の集団で、あることを白という人が２人、黒という人が２人、どちらでもない無関心という人が６人いたとする。白だと主張する２人が強く主張すると、どちらでもない６人が影響され８人が白になり、結果として多数決方式では全体が白ということになる。世の中の風潮はこうして変化していくという。

まさに、「伏石事件」はそうした事件だと考えられないだろうか。優れたリーダーが正しい先見性のもとに尽力し、多くの小作農民が動き、小作料を下げることに成功した。そ

して全国に波及した。まさにこれが政治なのだと思った。

昔のことではあるが、戦後政治の一翼を担った社会党という政党があった。こういった事件の際優れた指導者のもとで多くの人々が一つの方向性を持って乗り越えていったのではないだろうか。この闘争のために、中央から指導に来ていた人の中に、元社会党委員長の浅沼稲次郎氏がいた。さらに、この「伏石事件」に関係して働いた平野市太郎氏が、高松市出身の元社会党委員長成田知己氏を、社会党に入党させている。やはりそれなりの人が係っている。

面白いデータがある。香川県出身の社長の割合（図１参照）は全国でもトップクラスである。香川県民の県民性だろうか、組織のリーダーになる人材が多い事が分かる。これをどうやってこれから育成していくか。私は教育だと考える。いかに教育に力を注がせるか、これも政治であろう。この「政治に力を注がせる」というキーポイントが若者である。

都道府県別社長輩出率

順位		前年	都道府県	輩出率	人口（千人）	前年
1	←	1	徳島県	1.407%	743	1.362%
2	←	2	山形県	1.281%	1,102	1.285%
3	←	3	香川県	1.188%	967	1.191%
4	←	4	秋田県	1.179%	996	1.169%
5	←	5	愛媛県	1.057%	1,364	1.049%
6	←	6	山梨県	0.996%	823	0.996%
7	↑	8	広島県	0.984%	2,829	0.971%
8	↓	7	大分県	0.982%	1,152	0.983%
9	←	9	島根県	0.973%	685	0.966%
10	←	10	福島県	0.967%	1,882	0.960%

人口：総務省「人口推計」（平成29年10月1日現在）

東京商工リサーチ調べ

図１　都道府県別社長輩出率〈東京商工リサーチ調べより〉

魅力ある香川県にするために

～香川県は日本一安全安心な県、人づくり・人を育てる県～

発想を転換してみよう。現在も香川県の日照りが続き、水が少ない弱みは変わらない。ということは、一年中太陽がサンサンと降り注ぎ、温暖な気候で県民は頑張り屋さんで、水不足になる程台風が来ず、地震も少ないく災害の少ない香川県（図２参照）は日本一安心安全な県を標榜しても良いのではないだろうか。人を育む場として日本一適していると言える。

順位	都道府県（災害ハザードマップ）
1位	滋賀県
2位	佐賀県
3位	香川県
4位	徳島県
5位	富山県
6位	長崎県
7位	福井県
8位	鳥取県
9位	石川県
10位	高知県

図２　災害に強い都道府県ランキング１位～10 位
〈住所検索ハザードマップより〉

「人づくり、人を育てる」ために。

香川県の年齢３区分別人口の推移（図２参照）を見ると 20 年後の老年人口は 37.0%。年少人口は県民全体の 10.8%、生産年齢人口は 51.8%である。このことから、なんらかの対策を講じなければ少子高齢化は食い止められない事が分かる。お年寄りには、少々我慢してもらって、県独自で出産育児等の補助金を出せないものだろうか。児童生徒の学費をタダにできないものだろうか。

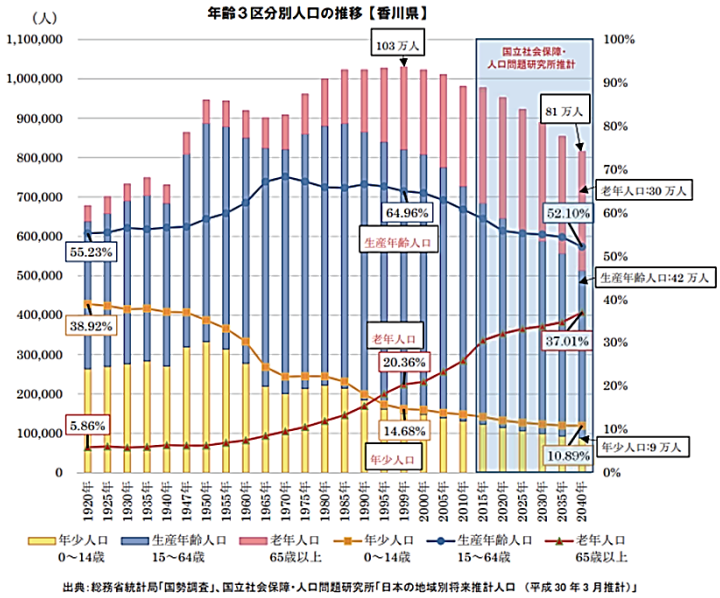

図３　年齢３区分別人口の推移【香川県】
〈出典：総務省統計局「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口　（平成 30 年 3 月推計）」〉

「育てる」ことについて気になることがある。学校生活が大きく変わろうとしているらしい。例えば部活がなくなると聞くがクラブチームに吸収されるのだろうか。チーム kagawa のジュニア育成に関しては新体操の喜田純玲さんやバドミントンの桃田賢斗さんの例は成功と言えよう。このノウハウを教育にも活かせないものだろうか。例えば学習に塾の力を借りたらどうだろうか。放課後は生徒全員がクラブチームで練習するか塾で学習するか。朝家を出たら夜帰ってくるまで学習か部活動をしっかりやる。香川県全体を教育特区に指定してもらい、独自の教育システムを構築出来ないものだろうか。とにかく今の高校生は学習も部活動も一部の生徒を除き中途半端である。このままでは香川県の生徒は全国のレベルからおいていかれるのではと危惧する。香川県はこういったことを実験的に行うには丁度良いサイズの県ではないだろうか。

「人が集う」ために。

先日、総文祭で和歌山市に行ったとき、他県の多くが県レベルの大会でも宿泊しないと参加できないと聞いて驚いた。香川県では朝少し早く家を出ると県内の学校が全部集まって大会ができる便利さに、人が集うには最適の県だと思った。この香川県独自の利点を活用しないという手はない。

また、小さな県で、水もないため大型の工場の誘致は無理だと思うが台風も地震もめったに来ず、災害の少ない香川県は貴重なデータの避難の場になるのではないか。サンメッセは同様の施設があり情報の避難場所になっていると聞く。さらに発展させて日本中の情報の集積場にならないだろうか。近くに香川大学工学部がありサンメッセにある他の研究機関と連携したり、工場ではなく研究機関を誘致したりして充実させれば、日本中から人が集まるのではないだろうか。

「若者文化」を取り込め

まとめとして、人が集まることのキーポイントとして私は「若者文化」をあげたい。今回のオリンピックでスケートボードやサーフィンで 10 代の若者が大活躍している。その姿がクローズアップされているが、私はテレビを視聴していてアナウンサーや解説者が「10 代の選手の会話している内容が理解できない」と苦笑していたのが気になった。

素朴な疑問として、若者とは何歳ぐらいなのだろうか。仕事につくとツールの使い方が変わるという。そこで、若者文化の中心だろうと考えられるスマホの使用年齢に注目したい。仕事用のスマホとプライベート用のスマホを持つ者がいるように、スマホを持ち始めるであろう 12 歳から就職前と考えられる 22 歳までを若者として論じたい。

さらにこの「若者文化」として「ツール」に注目したい。大人社会ではあまり認められていない言葉らしい。しかし、スマホというツールを使えばそこに行かなくても会話が成り立ち、多くのことができる。このような「ツール」を取り込むのに長けているのが、先程のアナウンサーや解説者が苦笑していた若者である。

若者は何を標榜しているのだろうか。今の社会ではSNSやネットに代表される「多数の共感を得ること」が重視されている。しかし、若者は小さな集団で共有できる言語や感覚を求めているのではないか。そしてその小集団や他の人を繋ぐのがツールなのである。

若者をすべて肯定しようというのではない。若者文化を批判することも大切である。今の社会では大人は若者を評価するが、若者は大人を評価しない。過去に若者が大人を「評価」ではなく「批判」したことがあった。それを学生運動と呼んだ。強烈に大人社会を批判した。なぜか今は学生運動の影すら見えない。若者は大人を批判すること・評価することを止めたのか。

「郷土香川を元気にする」これは非常に楽観的な希望である。良い意味で、楽観的に香川を良くしていく方向性なのである。しかし私は敢えて、「若者が「ツール」を用いて大人たちと渡り合っていくこと」、「大人たちが視野を広く持って、若者に対するワンパターンな評価から離れ、認める努力をすること」、これらによって変えていくべきだと考える。

香川を元気にするために、「香川のため」に若者の力を存分に発揮すること、それは当たり前だ。その上に、「全国に先駆けて香川を変えていくこと」まで考えていくのだ。数で敗する若者（少子）は、多数派である大人（高齢者群）に対し、新しい時代に適応した行動力で勝っていかなければならない。

【参考文献】

災害に強い都道府県ランキング！
日本で自然災害の少ない安全な県は？
https://address-hazardmap.com/todouhuken-saigai/

2017年「全国社長の輩出率、地元率」調査
～ 「輩出率」首位は徳島県、「地元率」最高の沖縄県は唯一90％超 ～
https://www.tsr-net.co.jp/news/analysis/20180910_03.html

かがわ人口ビジョン　令和2年3月改訂版.indd
https://www.pref.kagawa.lg.jp/documents/139/stqsmy200330204820_f04.pdf

玉川大学　多賀譲二　「水はいのち…讃岐の人と風土」